

## 尺度使用マニュアル

### <尺度名>

抑うつ的反すうに関するポジティブな信念尺度

### <測定概念>

抑うつ的反すう(自己の抑うつ気分・症状や、その状態に陥った原因・結果について消極的に考え続けること)に関するポジティブな信念の確信度を測定する尺度。理論的には、この信念を強固に保持する個人は、抑うつ的反すうを始発し、持続させやすいと考えられている。抑うつ的反すうに関するポジティブな信念の確信度を測定する尺度は海外において作成されているが(Papageorgiou & Wells, 2001; Watkins & Baracaia, 2001), 本尺度は日本人より抽出された項目を踏まえて作成されている点や、複数の因子から構成されている点などが特徴として挙げられる。

### <適用範囲>

大学生を対象とした調査で尺度の開発や他の変数との関連性の検討が行われているが、他の属性のサンプルにも適用できるものと考えられる。

### <尺度構成手続き>

大学生181名を対象に実施した予備調査の結果を踏まえ、元項目を作成した。続いて、大学生401名より得られた回答を踏まえ、“人生への悪影響の回避”，“問題解決能力の向上”，“感情制御の促進”，および“現状の悪化の回避”から構成される尺度を作成した。

### <信頼性>

上記の401名を対象とした調査において、各因子の $\alpha$ 係数は.80～.85という値が得られた。また、大学生71名を対象に4週間の間隔を明けて2度調査を実施した結果、各因子のある程度の再検査信頼性が確認された( $r=.69\sim.71$ )。

### <妥当性>

大学生を対象とした調査において、各因子得点と、日本語版 Metacognitions Questionnaire-30(山田・辻, 2007)の“心配に関するポジティブな信念”因子、および心配に関するメタ認知的信念尺度(金築・伊藤・根建, 2008)の“心配に関するポジティブなメタ認知的信念”因子の各得点とに正の相関係数が得られ、尺度のある程度の構成概念妥当性が確認された。

なお、大学生368名を対象とした調査において、“人生への悪影響の回避”と“現状の悪化の回避”の各得点は、抑うつ的反すうの頻度を測定する日本語版反応スタイル尺度(名倉・橋本, 1999)の“否定的考え込み”因子の得点と正の有意な相関関係にあることが示

された(共に,  $r=.38$ )。一方, “問題解決能力の向上”と“感情制御の促進”の各得点は, “否定的考え込み”得点とほとんど関連していなかった(それぞれ,  $r=.13, .11$ )。

<採点方法>

“人生への悪影響の回避” = 項目 1+6+11+12+15  
“問題解決能力の向上” = 項目 4+5+9+13+16  
“感情制御の促進” = 項目 2+3+14+18+19  
“現状の悪化の回避” = 項目 7+8+10+17+20

<尺度の使用について>

研究の目的に合わせ, 尺度を改変して使用することは可能。

<出典文献>

長谷川晃・金築優・根建金男 (2009). 抑うつ的反すうに関するポジティブな信念の確信度と抑うつ反すう傾向との関連性 パーソナリティ研究, **18**, 21-34.

<連絡先>

長谷川晃(東海学院大学人間関係学部心理学科)

Mail-address: mail-ad.of.hasse[at]tokaigakuin-u.ac.jp

URL: <http://island.geocities.jp/deprumination/>

<無料・有料の別>

無料。

<著作権関連情報>

出典を明記のうえ, ご自由にご使用ください。

<その他>

<妥当性>の箇所にて言及した通り, “問題解決能力の向上”と“感情制御の促進”は抑うつ反すうとの関連性が示されなかった。後続する研究の結果より, これらの因子には不備があると考えられ, 尺度を改訂する必要性が示唆されている。詳しくは下記の文献を参照されたい。

長谷川晃・金築優・根建金男 (2010). 抑うつ反すうを促す反すうする利益に関する信念の内容 パーソナリティ研究, **18**, 248-251.

長谷川晃・井合真海子・根建金男 (2010). 抑うつ反すう傾向の高い大学生が保持する抑うつ反すうに関するポジティブな信念の内容 早稲田大学臨床心理学研究, **9**, 49-59.